

## 協同する子ども、協働する保育者

前原 寛

(保育所理事長)

「人間は社会的動物である」とアリストテレスが記したように、人は人を求めようとする本質的な傾向があり、それは子どもも同じである。子どもの協調性の代表的なものは、協同的遊びといわれるものである。例えば、四、五歳児のごっこ遊びのグループでは、お母さん役、お父さん役、赤ちゃん役、お客さん役などを演じながら一つのストーリーを展開していく情景が現れる。ルール遊びにおいても協調性は見られるし、一つのテーブルを囲んで楽しく食事をとるような生活活動においても協調性は発揮される。もちろん、生まれつき協調性を持っているのではなく、日常の遊びや活動の中でお互いにかかわり合いながら、さまざまな体験を通して協調性を獲得していく。

子どもの協調性の獲得には、保育者の協調性が必要である。そのことは、チーム保育や保育者の協働として従来から指摘されている

ここで「協同」と「協働」の使い分けに留意しておきたい。辞書的な意味でいえば、「協同」は複数の人または団体が、力を合わせて物事を行うこと。「協働」は同じ目的のために、対等の

前原 寛 (まえはらひろし)

社会福祉法人至宝福祉会理事長。鹿児島国際大学元教授。

主な著書：『子育て支援の危機 ― 外注化の波を防げるか』

(創成社)、『保育者論』(共著、萌文書林)。

立場で協力して共に働くこと。」となっている（『デジタル大辞泉』 小学館 二〇一二年）。協働には、「同じ目的のために、対等の立場で」とあるように、保育者同士が職場の同僚として保育実践にいそしむという意味合いが込められている。他方、協同では「力を合わせて」が主になっているが、子どもの遊びは何かの目的のために行うものではないことを考えれば、この使い分けは納得できるものである。

子どもの協同のために保育者の協働は重要であるが、実際にはクラス担任が孤軍奮闘している保育現場を見かけることが少なくないのも事実である。保育者の孤立は、子どもの統制を強めることになり、「子ども主体」が失われていく。子ども主体の保育のために、保育者という専門職が協力することの必要性を認識し、それぞれの役割を遂行するということに異論はなくとも、それは容易なことではない。

なぜ保育者の協働は困難なのだろうか。その理由によく挙げられるのが、人間関係である。人間関係に問題があると協働も成立しない、確かにそれはその通りである。では、人間関係が良好であれば保育者の協働が十分機能するかというと、そうとも言い切れない。お互いの仲はいいのだが協調性があると言えるほどではなく、それぞれが孤立しているように感じられる現場もある。人間関係が良好であることと協働の成立は、必ずしもイコールとは言えない。

このことをもう少し考えてみたい。一般にチーム保育や保育者の協働というと、お互いが役割分担を理解し、支え合うような関係になることと理解されているのではないだろうか。これは筋が通っているようであるが、ソーシャル・キャピタル註の視点からは興味深い指摘がなされ

ている。協調性が成立するには、お互いが支え合うという相互支援が重要であることは明白であるが、相互支援について、「自分が受け取る分だけを相手に与える」と理解してはいけないというのである。これは、等価交換の落とし穴と言える。つまり、自分が相手のために与えた分だけ相手にも自分のために返してもらおう、あるいは、相手から与えてもらったその分を相手に返すという考え方である。

このように、相互支援を等価交換と見なすと、与えてあげたのに返してもらえないなら相手に与える必要はないという結論になる。しかも私たちは、一般的な傾向としてだが、与えたことは過大評価するが、もらったことは過小評価する傾向がある。そのため、等価交換のつもりでも、「少なく与え、過分にもらう」という不等号を等価交換と錯覚してしまう。その結果、「お互い支え合おう」といつても、与えてもらった分より少なく返すことになり、相互支援が成立しなくなる。つまり、チームを組み、役割分担をしても、お互いの支え合いが成立せず、協働として機能しないのである。

ではどうすればいいのか。この点についてベーカーは次のように指摘している。

「我々は相互支援の力を意図的に追い求めることはできないということである。意図的に相互支援を求めようとすると失敗する。……逆説的に言えば、相互支援の力を求め得るのは、相互支援を見返りとして期待しないで他人を助ける時である。」(ウェイン・ベーカー『ソーシャル・キャピタル』中島豊訳 ダイヤモンド社 二〇〇一年 pp.195-196)

ここでいわれていることは、等価交換の原則こそが相互支援を妨げているということである。相互支援は、見返りなしに他者を支えることを通してしか成立しないのである。この指摘は、「情けは人のためならず」ということわざを思い出させる。「人に親切にすれば、その相手のためになるだけでなく、やがてはよい報いとなって自分にもどってくる」(『デジタル大辞泉』)というこのことわざは、協調性の本質を突いている。見返りを求めずに、子どものより良い育ちを実現する保育を実践するために他の保育者を支えようとするのが、結果として保育者の協働を成立させる。結果として、というところが重要なのである。最初から協働を目的とするのではなく、保育実践を共通項に、他者のために自分に何ができるかを真摯に考えて取り組むことが、保育者の協調性である。

子どもの協調性の育ちを支えるために保育者の協調性が重要であるが、保育者同士が「支え合おう」とそれを直接の目標にしてしまうと、逆に協調性から遠ざかることになる。協調性は、直接的に求め得るものではないのである。

そういえば、子どもは、見返りを求めることなく、遊びに専心する。それ故子どもの協調性は随所に現れてくる。それに対し、保育者の協働的集団の成立が困難なのは、私たちの中に見返りを求めがちな心が潜んでいるからかもしれない。そう思うと、「子どもに学べよ」という先人たちの言葉が、改めて響いてくる。

注 ソーシャル・キャピタル・「社会関係資本」と訳されることが多いが、明確な定義はない。一般的には、集団組織などの在り方や社会的ネットワークの重要性を説く概念である。